

特集にあたって

近畿大学医学部奈良病院整形外科・リウマチ科 教授

宗圓 聰



今回、「Treat to Targetと最新の骨粗鬆症診断・治療」というテーマで特集を組ませていただきました。種々の疾患において治療目標達成に向けた治療ストラテジー（Treat to Target）が提唱され、各疾患における重要なアウトカムの抑制に役立ってきました。骨粗鬆症においても同様の意味のGoal-directed treatmentという治療方針が提案されています。そこで、本特集ではまず、Treat to Targetの基本的な考え方について解説していただいた上で、骨粗鬆症の治療目標について解説していただきました。

診断・治療の総論として、原発性骨粗鬆症の薬物治療開始基準と治療効果判定について解説していただいた後、閉経後骨粗鬆症、男性骨粗鬆症および続発性骨粗鬆症の代表としてのステロイド性骨粗鬆症、生活習慣病に伴う骨粗鬆症、さらに近年海外では指針が相次いで示されている癌治療に伴う骨粗鬆症、それぞれに対する薬物療法について解説していただきました。

骨吸収抑制薬に関連する顎骨壊死と非定型大腿骨骨折は骨粗鬆症治療に際して重要な問題であり、これらに対する対応について解説していただきました。なお、顎骨壊死に関しては、2018年11月の日本口腔外科学会総会・学術大会における日本骨粗鬆症学会との合同シンポジウムにおいて、歯科治療に際しての予防薬は不要とのコンセンサスが得られたものと考えます。

さらに、骨粗鬆症治療薬の今後の展望について解説していただきました。このうち、抗スクレロシン抗体であるRomosozumabは、本誌がお手元に届く頃には世界で初めてわが国で承認されているかもしれません。

現在の治療目標としては、骨密度やFRAX[®]が用いられています